

# Canterbury, Walsingham, Elyを訪ねて

木 下 卓

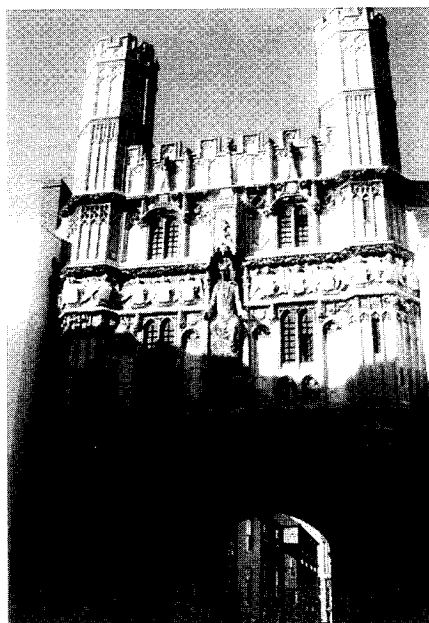
ケント州カンタベリーは言わずと知れた聖地であり、グレイト・スタウア川沿いに広がるこの街の旧市街はほとんどが城壁で囲われ、城門のひとつ（ウェスト・ゲイト・タワー）が残る、典型的な中世の城塞都市の佇まいをみせている。ロンドンからやって来る巡礼者たちはこの門をくぐり、カンタベリー大聖堂へと向かっていったのである（現在では、もちろん列車や車でやってくるのだが）。この大聖堂は、地下のノルマン様式に始まり、初期ゴシック様式、中期ゴシック様式と、ひとつの大聖堂に教会建築の移り変わりを見ることができる。1534年、ヘンリー8世がみずからの離婚問題を契機にローマ・カトリックから離れ、英国国教会を設立した後は、城塞の中心部にそびえるカンタベリー大聖堂の大主教が全聖公会の首席主教である。ローマ・カトリックの時代から有名な巡礼地であったが、英国国教会に変わってからも巡礼地であり続けるのは、この大聖堂が英国国教会の総本山であり続けているからである。

ここがイギリス屈指の巡礼地として有名になったのは、大聖堂内で1170年に大司教トマス・ア・ベケットが国王ヘンリー2世の配下によって暗殺されたことに始まる。ベケットの死後、さまざまの奇蹟が起り、彼の遺骨には不治の病を治す力があると崇拝されるようになって、この地を訪れる巡礼の数が増加したのである。ベケットが暗殺された大聖堂内の場所には、今でも彼を殺した3人の王の配下を表す3本の剣が飾られている。また、この大聖堂内にはヘンリー4世、黒太子エドワードの遺体も埋葬されていることでも有名である。しかし、この地をもっとも有名にしたのは、ジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』（Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, 1387-1400）であろう。

立ち返る春、ロンドンの南郊 サザークの旅籠に集まった29名の面々は、上は宮廷、教会を代表する騎士や尼僧院長から下は召喚吏や免罪符売り、バースの女房や農夫にいたる、中世のあらゆる階層を代表する者たちである。馬に乗ったこの集団が、カンタベリー大聖堂に祀られているトマス・ア・ベケット聖人の墓に参詣する道中、旅のつれづれを慰め合うための余興として、お馴染みの昔話を語り比べするという一大説話集である。これを読むと、聖地カンタベリー詣では日本の伊勢神宮詣で、もしくは日光東照宮詣で等に似ているとは言えないだろうか。身分の貴賤を問わず、一生に一度は詣でてみたいと人々が願う場所なのである。



カンタベリー大聖堂



カンタベリー大聖堂へ続くクライスト・チャーチ・ゲイト

ノーフォーク州北部のウォルシンガムは、ケンブリッジから北東へ車で2時間ほど行った所に位置する小さな村である。この村が、中世における北ヨーロッパの有名な巡礼地のひとつとなったのは、ウォルシンガムの伝説によると、1061年に、この地に住むあるサクソン人の前に聖母マリアが立ち現れ、受胎告知を記念してナザレの聖家族の家のレプリカを建てるようにと指示した。できあがったウォルシンガムの聖なる家は、鏡板で装飾され、膝にイエスを抱いて玉座に坐す処女マリアの木像が納められた。さらに、1153年にはアウグスティノ修道参事会が結成され、告解王エドワード（1042-66）の時代にウォルシンガム聖母教会（the Chapel of Our Lady of Walsingham）が建設されて、1年後には参事会を正式に認めて小修道院に囲い込んだ。そして、イングランドやヨーロッパ大陸各地から一般の巡礼や信者ばかりか、エラスムス、エドワード1世、2世、3世、ヘンリー6世、7世、さらにはヘンリー8世さえもが訪れる有名な場所となったが、ヘンリー8世の修道院解体令によって1538年に解体された。エリザベス時代には、作者不詳のバラッド「ウォルシンガムの嘆き」（‘The Walsingham Lament’）に謳われるほど、聖母教会の喪失はノーフォークの人々にとっては大きな悲しみであった。

おお、ウォルシンガムは嘆く、嘆く  
その昼間は夜となり  
祝福は瀆神に変わり  
聖なる行為は侮蔑へと変わった

われらが聖母の坐す場所は罪となり  
天国は地獄に変わり  
われらが聖母の支配した場所には悪魔が坐す  
おお、ウォルシンガムよさらば！



ウォルシンガム・アビーの遺跡



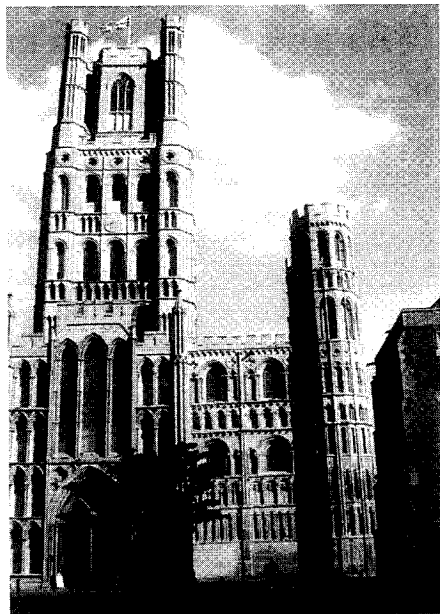
ウォルシンガム聖母教会の遺跡

ケンブリッジの北東14マイル（23km）、グレイト・ウーズ川に面する人口1万5千人ほどの小さな都市イーリーには、イーリー大聖堂が空高くその堂々たる姿でそびえ立っている。かつてはフェンズ（沼沢地）であったが、18世紀には灌漑工事が終わり、現在の街となった。イーリー（Ely）という町の名は、フェンズ

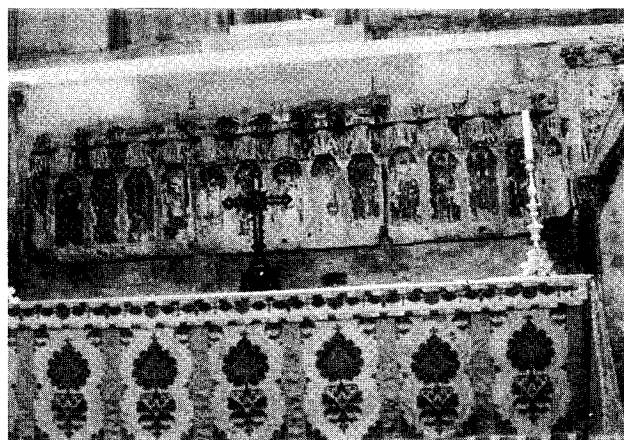
だった頃はウナギ（eel）が多くいた島であったことに由来するものである（‘-y’は、「島」を意味する）。この大聖堂は、「フェンズの船」（Ships of Fens）として知られる。低地に広がる湿地帯を遠くから威圧する塔の眺めが、フェンズに浮かぶ船のように見えたからである。

7世紀の創建者、聖エセルドリーダを祀っていた最奥部の内陣（the Presbytery）は13世紀に造られ、中世には多くの巡礼者が訪れたが、クロムウェル軍によって破壊された（ピューリタン革命の指導者オリヴァー・クロムウェルは、この街の出身者であり、彼が暮らしていた家は、現在トラヴェラーズ・インフォメーション・センターとなっている）。

この大聖堂は、ウィリアム1世の時代の1083年に建設が始まり、1351年に完成したものだが、大聖堂わきの聖人像が宗教改革によって傷つけられているのを見るならば、その偶像破壊のものすごさに怖気が走るほどである。



イーリー大聖堂



イーリー大聖堂内の破壊された偶像